JOBURG EXPRESS

3月　発行　No.13

ヨハネスブルグ日本人学校　中島緑郎

もう一か所、隣国のレソト王国を訪ねました。その１

この休み中たまたま観た 2 本の映画が、私が南アフリカに来て以来漠然と感じていた違和感の正体を教えてくれることになりました。

1 本目はエジプトへ向かう機内で観た『DISTRICT 9』。ヨハネスブルグを舞台にした SF 映画です。ヨハネスブルグに異星人の宇宙船が漂着し、食糧不足から弱っていた 100 万体の異星人を難民として受け入れてから 28 年後の現代、という設定です。異星人はまるで黒人の住むタウンシップそっくりのシャック小屋ひしめく特別区域『DISTRICT 9(第九街区)』に住まわされており、劣悪な環境に苦しみながら暮らしています。ヨハネスでは異星人の暴動などが問題となり、自分たちの町からは離れた別の区域に彼らを移住させようとします。その移住計画を進める責任者が主人公です。彼は退去を勧告して回るうちに異星人科学者が開発した液体を浴びてしまい、DNA に変調をきたして体が異星人化し始めます。治すには異星人の協力が必要ですが、人間も彼を実験材料として捕まえようとします。異星人を排除する立場だった主人公がタウンシップに逃げ込み、排除される立場を味わいます。

もう 1 本は『ターミネーター』や『タイタニック』を監督したジェームズ・キャメロンの『AVATER』。こちらも SF です。ある惑星で希少鉱物を採集しようと企んだ人間が、DNA 操作で作りだした現地人(？)に人間の意識を乗り移らせて戦力にしようとします。乗り移る役目となった主人公はひょんなことから現地人と仲良くなり、自然とともに生きる彼らの文化に触れて侵略者の立場から侵略を受ける側の立場に変わっていきます。

この 2 本の共通するのは、支配する側だった主人公が、される側の立場を味わって意識を変えていくという点です。私は南アのカフェで食事をするたびに、客席には白人、給仕は黒人という構図を見てきました。自分が安くて快適な食事をとれるのは、多分黒人が安い賃金で働いているおかげです。現地スタッフの方々と一緒に歌ったり、発表会に協力してもらったりしながら、自分は明らかに彼らを虐げてきた側にいる。どうしようもできないけれど、なんとなく居心地が悪い。その違和感だったのです。

今回、休みの後半は隣国のレソト王国を訪ねました。宿泊したところはたまたま PITSENG という外国人が誰もいない小さな町のゲストハウスでした。特に何をするわけでなく、ひたすら国内を走って村の様子を見て回りました。美しい山々に羊や牛を追うレソトの人々の家は、電気もなく山肌にはりつくように並んでいました。文化村で見せてもらった彼らの文化は質素ですが気高いものでした。土で作った壁にはポップで創造性豊かな模様が描かれていました。彼らと同じ生活をしたいか、と問われれば答えはＮＯです。でも、少しでも彼らの文化に触れて心が動かされたという体験は、例の違和感をちょっとだけ和らげてくれる気がしています。

ドラケンスバーグの北、ゴールデンゲート国立公園を抜けてレソトを目指しました。首都・マセル近くには大きなボーダーポストがありますが、カレドンスプールトという町から入国することにしました。

ゴールデンゲート国立公園内に、『Basotho Cultural Village』があります。ここはソト人の伝統的な生活を紹介している施設で、16 世紀から 20 世紀までの代表的な住居が集められていています。ガイドツアーを頼むと、酋長に紹介してもらう儀式から始まって、説明を受けながら 3 人の奥さん(！)の家などを見学できます。

小豆のような豆をすりつぶしただけの粉が甘くておいしい！

20 世紀の家は屋根がトタン張りになって、天井が高い。なにより、壁や棚をパステルカラーで塗ってある。娘いわく“ディズニーランドのミニーちゃんの家みたい”。柱はまるでガウディ？

レソトと南アの国境。レソトの係官はとても親切でした。